

## 19. 牧神の恐怖

われわれが英語を学んだころには、“潘匿克”（Panic）という語があると、字典を調べても“過度の恐怖”としか言わないから、いったいどんなことか分からなかった。後になって自分でいくつかの事を経験してみて、始めてその意味がわかった。一度は一九一一年の秋、革命の潮流が東南に押し寄せ、われわれの県城もすでに光復した。突如ある日の午後、みんなは四方に逃げ惑い、ただ“来た来た！”と言うだけ。推測するに多分杭州駐在の軍が殺しに来たと言うのだろうが、しかしみんなははっきり言えない。今年の四月の北京の恐慌も酷く、いつもとは違っていた。これも“潘匿克”の一例とすることができる。

“潘匿克”という語の来源は語ればとても面白い。実際の経験はあまり気持ちの良いものではないけれども。語源字典によれば、潘匿克の源はギリシア語の To Panikon から出て、To Panikon Deima の略で、意味はパンの恐怖だということである。パン(Pan) は牧神で、人身羊足、頭には羊の耳羊の角があり、好んで笙の笛を吹くことが、ギリシア神話に見え、文学および美術作品にもたくさん出てくる。だが彼は昼寝も好きで、誰かが驚かしでもすれば、彼は羊の群れや人間を突然恐怖に陥れ狂奔させ、災いを起こす。これが牧神の恐怖という一語の成り立ちの理由である。テオクリトス(Theokritos) の『牧歌』第一章に云う。

“いや、牧人よ、われわれは日中には笙を吹くべきでない。あの牧神を恐れるからだ(To Pana dedoikames)、というのはその時には彼は狩に疲れてちょうど休んでいるところだからだ。”

『旧約』の「詩篇」第九十一首第六章にもともとこういう二句がある。（官話訳本による）

“闇夜に行く瘟疫も、あるいは昼間に人を滅ぼす病毒も恐れはしない。”\*末句は七十人訳ギリシア語本では“日中の鬼禍”としていて、ローソン(J. C. Lawson) の『現代ギリシアの民俗と古代宗教』によれば、つまり牧神の恐怖という迷信の遺留だと言う。だいたいギリシアの正午はとても暑く、昼寝にはもってこいである。だが又たやすく夢魔に魘されたり病気になったりする。だから人々はその時間を少し怪しく、パンの機嫌を損ねるだけでなく、サイレンに逢うのも（『雨の日の書』に彼女について述べた一篇がある）、大抵がこうした時刻だと思った。中国はこうした経験に最も豊富であるのに通用する名前がないのは、どうしてだか分からない。それでわたしは字典を編むことの難しさに思い至る。一句に注するのはなんでもないが、一字（あるいは語）を対訳しようとするれば、それはなかなか容易ではなくなる。

※初出：1926年5月17日『語絲』第79期

---

\*『旧約』「詩編」91. 6~7. “暗黒の中を行く疫病も、真昼に襲う病魔も、……あなたを襲うことはない。”新共同訳版。